

創世記

これは聖書の一番はじめにある書で

その内容は大きく2つに分けられます

1章から11章までは神と世界全体について12章から50章までは神とアブラハムそして彼の家族に焦点を当てたストーリーです

2つのセクションは12章の最初の部分によって結び

合わされています この構造は創世記全体のメッセージ

を理解する手がかりとなり また聖書全体の導入ともなっている

のです

創世記の始めに神が聖書の冒頭

に書かれている無秩序と闇から秩序と美と善きものを生み出し

命が花開く世界を創造されたと記しています

それから神は人間あるいはヘブル語でアダムと呼ばれる

生き物を造ったのです 人間は神の似姿として造られました

これは神が与えた人間の目的と役割を指し具体的には

神のご性質を反映させながらこの世界で生きるということです

また御心にしたがって世界を管理するという仕事も託されました

この世界の資源を有効活用し自然を守り

命がますます繁栄するような環境にすることです

神は人を祝福されましたこれは創世記のキーワードになります

神は人間に園を与え人間はそこから新しい世界を築き始めました

ここで重要なのは人間がその世界をどう築いていく

かについては選択の自由があったということです

それを示すのが善悪の知識の木です

これまでは何が善で何が悪かを教えるのは神でした

しかし今神は人間に尊厳と選択の自由を

与えようとしておられるのです さて人間は善悪について神の判断

自分の判断どちらを選ぶのでしょうか 自分の判断を選ぶなら失うものは

大きいのです 神に反抗するということは命の

源に背を向けることでそれは死に向かっていくことになります

そのことを示しているのがいのちの木です

第3章では謎めいた存在蛇が登場します

この蛇については最初は神の被造物であること以外
何もわかりませんしかし蛇とは 神に逆らった者で
人間をも神に逆らわせ 死に追いやりたがっていることが
わかってきます

蛇は善悪の知識の木と人に与え
られた選択肢について 神とは違うことを言います
善悪を知るようになって死ぬ ことはなく
むしろ神のようになって生きる ことができるのだというのです
ここには悲劇的と言っていいほど の皮肉があります
というのも人はもともと神の似 姿として造られているのですから
しかし人間は神を信頼するよりも 自分の判断を選び
善悪の知識を手に入れました そしてその瞬間人類の転落が始まり
ました まず壊れたのは人間関係です
男と女は自分たちの関係のもろ さに直面しました
彼らはもはやお互いを信じることも できないのです
そこでいちじくの葉を綴って自分の 体を隠しました

次に神と人間との親密さも失われ ました
人は神の目を逃れようと逃げたの ですそして見つかると
どちらが先に神に背いたかについて 責任を押し付けあいました
ここで神の蛇に対する宣告人間 に対する宣告
彼らの行いが招いた悲劇について の短い詩が配置されています
神は一見すると勝利を収めたか のような蛇に対し
おまえの敗北はすでに決まって おり
ちりを食らうようになると告げ ます
そしていつか女の子孫が蛇の頭 に必殺の一撃を与えるというの
ですすばらしい約束のようです がこの勝利には犠牲も伴います
蛇の頭を踏み砕こうとする者も 致命傷を負うからです
この傷ついた勝利者についての約束 は謎めいています

それにしてもここまでのストーリー の中で気づくのは
神の恵みです 神に逆らった人間に対し神は何を
されたでしょうか 彼らを救うという約束ですと言って
もそれは 人間がしでかしたことを帳消し
にするという意味ではありません 神は人間に家庭でも外でも

嘆きと痛みが押し寄せるだろう と宣言しました
それは彼らの背きの結果であり 彼らを死に導くものです

ここから更に暗い影がさしてきます
3章から11章は神に背いたことが あらゆる人間関係を破壊していく
様子を綴っています まずはカインとアベルという兄弟
の話ですカインは弟に嫉妬し 殺意を抱きました神はその欲望
に身をまかせないよう警告します が彼は野原で弟を殺します
その後カインは暴力と抑圧が支配 する街を築くことになり
レメクの話に至るのです レメクは初めて複数の妻をめと
った男です 彼にとって妻は所有物でした彼は
カインより自分のほうが ずっと暴力的であり徹底した復讐
者であることを自慢げに歌にします

続くストーリーには神の子らという
奇妙な存在が出てきます 彼らは墮落した天使のような存在
かもしれないし 神々の子孫だと自称していた古代
の王たちなのかもしれません 彼らもまたレメクのように複数の
妻をめとって子供をもうけ その子供たちはネフィリムという
戦士になりました 神の子らの正体が何であれ
彼らは神の世界を暴力と墮落で 満たしていたということです
神の心は嘆きで張り裂けそうでした 人類は素晴らしい世界を台無し
にし お互いを傷つけ合っているのです

そこで神はご自身の良い世界を守る ために
大洪水を起こして人類の悪を洗い 流されました
しかしノアという正しい人とその 家族は守り
ノアに新しいアダムの役割を与 えられました
神はノアのこと祝福しこの世界で 生きていくように命じます
希望に満ちたスタートを切った ようでしたがノアもまた
園で失敗してしまいます ブドウ畑を作った彼は泥酔してしまう
のです そのとき息子の一人ハムが
テントで寝ている父に対して恥 知らずなことをします
そのためこの新しいアダムの最初の アダムと同じように
裸で恥を見ることになりました ここからまた人類の転落が始まり
ます これらのことがバビロンの都建設

のきっかけとなるのです 古代メソポタミア人はレンガ作り
という新しい技術のもとに 集結しました
そしてかつてなかったような大きな 町や塔を
かつてなかったほどの早さで建て 上げていきました
そして神々に届くようにと塔を 建て
それによって名を上げようとした これは人類の反逆と傲慢の象徴
です 園での反逆のスケールが大きく
なったものなのです そこで神は彼らの思い上がりを
砕き彼らを方々に散らしました

この様に様々なストーリーが綴
られています ポイントはすべて同じです
神はいつでも人間に正しいことを するチャンスを与えますが
人間はいつでもそれを無駄にする のです
これらのストーリーが教えてくれる のは人類は善い世界に生まれ
それを台無しにしたということ です

なぜなら善悪の判断を自分でする 道を選んだからであり
私たちは皆この世にある損なわれた 関係対立暴力
そして最終的には死に対して責任 があります
しかし希望もあります いつの日か女の子孫が来るという
約束です 傷を負った勝利者悪を根源から
断ち滅ぼす方です 神は人の罪深さにもかかわらず
この世界を祝福し救われるのです いったいどのようにしてそれを実行
されるのでしょうか その答えは次回までこれが創世記
1章から11章です

500字要約

『創世記』は聖書の最初の本で、大きく2つのセクションに分かれています。第1章から11章までは神と世界について、12章から50章までは神とアブラハムおよびその家族に焦点が当てられています。これら2つのセクションは、12章の最初の部分によって結びつけられ、聖書全体の導入ともなっています。創世記の最初では神が無秩序と闇から秩序と美と善きものを創造し、人間(アダム)を造成しています。人間は神の似姿として造られ、神のご性質を反映させながら世界を管理する役割が与えられました。また、人間は善悪の知識の木についての選択の自由を持っており、自分の判断を選ぶことができました。

この選択が人類の転落の始まりであり、人間関係と神との親密さが損なわれていく過程が描かれています。

さらに、カインとアベルの物語、神の子らという存在、ノアと大洪水の物語、そしてバベルの塔の建設などが紹介され、人間の墮落と神の介入が描かれています。しかし、これらの物語からもわかるように、神は人間に対して常に希望と救済の約束を示しており、人間の墮落に対しても憐れみを示しています。

創世記は人類の転落と罪深さを描きつつも、神の恵みと救済のメッセージを伝えており、最後には女の子孫が悪を打ち破る約束が与えられています。